

# 避難家族と子どもたちの適応

## 地域との関係を踏まえて

---

平田 修三 = 石島 このみ = 持田 隆平 = 白石 優子 = 根ヶ山 光一

---

### 1 はじめに

2011年3月11日に発生した東日本大震災では、マグニチュード9.0という地震の大きさに加え、津波や原子力発電所事故といった複合的惨事が重なり、数多くの避難者が発生することとなった。復興庁（2014）によると、震災から約3年半が経過した2014年9月時点での避難者数は24万3,040名、そのうち関東への避難者は3万405名に上る。

筆者らが所属する早稲田大学人間科学学術院発達行動学研究室では、2011年6月より、震災により関東に避難した家族の調査・支援活動を行ってきた（「かささぎプロジェクト」）。その活動は多岐にわたるが、開始当初からとくに注目してきたのは、母子だけで関東に避難し、父親が居住地に残り続けるケースである。そうしたケースは避難家族全体のなかでも決して少なくないと考えられる。実際、2011年11月から2012年1月にかけて、埼玉県への避難者を対象に行った質問紙調査（根ヶ山ら、本書第30論文参照）によると、母子避難家族は、非警戒区域からの避難である場合が多く、父親を残して子どもを放射線の被害から守るために母親がその子どもを連れて逃れる傾向にあることが明らかになった。

また、母子避難家族は、自主避難であるがゆえに、とくに震災発生から間もない時期においては集団全体の把握が遅れ、行政対応・支援が行き届かない傾向が強かった。そして家族内においては、「子どもの父親剥奪」「父親における子剥奪」「夫婦双方における配偶者剥奪」とも言うべき事態を経験し、さらに母子は「旧地域ネットワークからの離脱と新地域への移入」という生活環境の変化にも直面する。家族はこれらに対し過酷な多重対応を迫られ、しかもそれが極めて長期にわたるのである（平田ら、2012）。

以上のことを踏まえつつ、本論文の目的や意義について論じる。まず本論文は、筆者らが実際に調査・支援活動を行ってきた二つの母子避難家族の事例研究である。とくに家族・子どもが「家族内外において、避難時・避難後に直面した人間関係上の危機・軋轢および新環境への適応」に注目し、それが時間の経過や状況との相互関連のなかで刻々と変化していく様子について検討していく。それにより、母子避難家族がさまざまな状況に直面しながらも震災後の生活に適応していく過程の一端を詳

細に描き出すと同時に、支援のあり方を考えるための視座を得ることを目的としたい。なお、同じく「母子避難者」の生活実態について質的に検討したものとして、たとえば紺野・佐藤（2014）、山根（2013）の調査を挙げることができる。そうした調査と比較した際の本研究の独自の点は、2011年6月から2014年現在までの定期的な調査を通じて、避難直後から現在にいたるまでの「過程」を描き出そうとしている点にあるといえよう。

本論文の内容は、筆者らがこれまでに報告してきたもの（平田ら、2012；平田ら、2013；根ヶ山ら、2012）と部分的に重複しつつ、その後の経過を含めてリライトしたものである。

## 2 方法——かささぎプロジェクトによる母子避難家族の調査・支援

### (1) 母子避難家族との出会い

2011年6月、福島県在住の研究室卒業生による紹介を通して、母子避難家族5世帯に接触し、震災体験の聴き取りを行った。その後、筆者らに提供可能な支援の提案をするとともに、以後の継続的な調査依頼を行った。

避難家族に対して提案・実施した支援は、避難直後で状況変化の著しかった時期にのみ行ったものも含めて以下のとおりであるが、これらは当然のことながら、母子避難家族のニーズの全てに応えるものではないし、筆者らが提供できる支援を全ての母子避難家族が望んだわけでもない。そうした事情もあって、2014年10月現在まで定期的に交流が続いているのは2家族である。なお、支援・調査を望まなかった家族に対しては、今後何か困った事態が生じた際にはいつでも相談に乗ることを伝えた。

### (2) 支援内容

- ・避難直後のため避難先で友達と遊ぶ機会が少なかった子どもと外遊びを行い、その間、母親に休息していただく
- ・PC・Skype 機器の提供による父—母子間の対面通信機会を提供する
- ・母子避難家族が立ち上げた「避難母子の会」（後述）の活動を支援する
- ・調査内容のフィードバックおよび育児等の相談に乗る（加えて、臨床心理士による対応も可能であることを伝えた）

### (3) 調査方法・倫理的配慮

刻々と変化する避難家族をめぐる状況を可能な限り包括的に捉え、かつ支援も含めて柔軟に対応する目的で、以下を同時に実施した。こうした調査・支援のプロセスは、研究者と実践者間の相互影響過程を踏まえたアクション・リサーチ（保坂、2003）として位置づけることができよう。なお、本調査は早稲田大学倫理委員会への届け出を経て行われたものである。

- ・母子の避難先への定期的な訪問によるインタビュー（2011年6月～）
- ・福島に残る父親へのインタビュー（2011年11月、2013年2月）
- ・ビデオカメラ・GPS・Actigraph（活動量測定器）による新環境下での子どもの行動の追跡記録

### 3 結果と考察——2つの母子避難家族の事例を通して

2011年6月から2014年現在にいたるまで支援・調査を行ってきた2家族（A家・B家）の語り・観察エピソード等のなかから、家族・子どもが家族内外において、避難時・避難後に直面した人間関係上の危機・軋轢および新環境への適応、についてうかがえたものをそれぞれ時系列に沿って提示しつつ、考察を加えていく。表1はその全体像を示したものである。

なお、以下で語りを提示する際には、「〔 〕」は筆者らによる質問、(略)は同一発話者内の省略、[ ]内は筆者による補足箇所を示す。また、下線は語りを説明するために適宜用いた。

#### 1 避難直後～2011年度

##### (1) 選択を迫られる場面での夫婦・親子・親族間に生じる意識のズレ

3月11日の震災や原発事故以降、さまざまな情報が飛び交い、状況が時々刻々と変化するなかで、家族はその都度何らかの決断を迫られることになった。その際、夫婦・親子・親族間において判断に齟齬が生じ、場合によっては対立に至るケースもあったようである。

母A： あんな水素爆発なんてあっても仕事に行くといっている夫を、えー、この人と家族でいいんだろうかっていう（笑）……思いもちょっとはしたというか。家族と逃げるほうが先じゃんって私は思ったりして。そこで一瞬、こう、「どうすんの？」って責めてしまった部分があった。(2011.6)

母B： [自主避難したことを]主人の両親には言っていない。(略)もともとあまり、そんなに[住居は]離れてはいないんですけど、連絡を取ってなくて。(略)いろいろ難しくって。世代の差でやっぱりね。避難するとかね、そういうのとか理解してくれない人とか多いから。やっぱり、国とか県がちゃんと指示とか出してくれるんなら理解してもらえるんだけど。そういう人ってやっぱり多いと思います。姑の理解が得られないから出られないとか。(2011.7)

母Aの語りでは原発事故の後で、一家で避難すべきと考えた母親と仕事を優先する父親との間で判断のズレがあったことが語られている。A家ではその後、夫婦が話し合ったうえで、父親が母子を関東に避難させ父親のみ単身で福島に戻るという決断を下した。その際に母親は、他の家庭では父親が反対し避難できないケースもあることを知り、改めて夫に対する感謝の気持ちが芽生え、むしろ夫婦の結束が強まった。

母Bの語りでは、関東に自主避難することを理解してもらえないのではないかという懸念から、当初は親族に避難することを伝えるのを躊躇したことが語られている。その後B家が自主避難したことを親族が知った際に大きな問題は生じなかったそうであるが、いずれにせよ、避難当初に親族に対して意識のズレが生じることを懸念する気持ちが生じたことは注意深く受け止める必要があると思われる。こうした状況は、避難者が避難すること自体を後ろめたく感じたり、親族同士で互いに助け合うことを困難にしたりすることにつながりえたと考えられるからである。

表 1 母子避難家族（A家・B家）の体験

1 震災直後 2011年度	母子避難家族（A家・B家）	
	(1) 選択を迫られる場面での夫婦・親子・親族間に生じる意識のズレ (2) 別離による寂しさ (3) 新旧の人間関係に対する複雑な心理 (4) 避難母子の会の設立 (5) 今後の見通しが立たず「宙ぶらりん」 (6) 子どものストレス表出 (7) 避難先コミュニティへの適応に関する子どものたくましさと消極性	
2 2012年度以降	関東で家族再統合（A家）	母子避難の継続（B家）
	(1) 家族再統合による安堵と戸惑い (2) 「避難者である」「避難者でない」の自己認識の揺らぎ (3) 人間関係の再編成 (4) 子どもの一番の親友は福島での友達	(5) 落ち着いて家族で話をする機会がとりづらい (6) 見通しの立たなさの継続とそのしんどさ (7) 非警戒区域における「避難した家族」と「避難しなかった家族」の不和

A家・B家の場合は幸いにも家族・親族の間で大きな問題に発展することはなく、むしろ結束が強まった部分もあったが、家庭によっては意識のズレが顕在化した後、それが埋まらずに軋轢が残るケースもあると推察された。

### (2) 別離による寂しさ

A家とB家では、福島に残った父親と関東の母子の間で頻繁に電話連絡をとりあったり、月1～2回のペースで父親が母子のもとを訪問したりする生活を送っていたが、それでも家族全員が別離による寂しさを感じていた。

母A： とくに息子は泣くのをこらえてそうなきがしょっちゅうある。別れるとき（母子を訪問した父親が福島に戻るとき）にしても……、最初のころは泣いてました、いつも。(2011.6)

ここでの寂しさは、父親との別離に加えて、それまで住んでいた土地や人間関係から引き離され、その後の見通しも立たないという状況が拍車をかけているのではないかと推測された。また父親も、家族と離れて独りで生活を長期にわたり続けることによる孤独感を訴えていた。

### (3) 新旧の人間関係に対する複雑な心理

母A： なんとなく向こうの友達に申し訳ない気持ちもあって、連絡しづらいしってのもあって。こっちに逃げてきた友達としか話さないのもあって。かといって、もともと地元[東京]にいる友達がいるんですけど、何人か会っても、私が一番心配な放射能のこととか、自分のこととかだけ話すわけにはいかないですし。(略)なんか、今の私にはちょっと違うなあっていうのがあって、ちょっと苦痛。(略)すごく皆様このへんの方は気さくに接して下さって。それはそれで本当にありがたく……。 (略)でも落ち着いてくると、だんだん会う機会が少なくなってきて。(略)私も半年しかいないかもしれないしなあっていう気持ちもどっかにあって。(略)仲良くしていただいていると思うんですけど、本音を話せるのはあの体験を一緒

にした友達って感じはしますね。(2011.6)

母B： 私の方がまだ入っていけないのかな(笑)。ママ友っていの？ いつもこうなんていの……。朝、登校班って言って、下に行かなきゃいけないのみんな。お母さんたちも出てくるわけ[子どもを学校に送り出す際に、マンション前広場に母親たちが集合する]。もうね、朝からみんなお化粧をして出てくるんだけど、そんなのできないと思って(笑)。(2011.7)

母Aの語りでは、下線で示したように「向こうの友達(=福島に残る友達)」「こっちに逃げてきた友達(=福島から関東に避難してきた友達)」「もともと地元にいる友達(=関東在住の友達)」「皆様このへんの方(=避難先近隣)」といった四つの人間関係に対して抱いた気持ちが語られている。福島から関東に避難してきた友達との絆が深まる一方で、福島に残る友達に対しては「申し訳ない」という気持ちが沸き起こり、さらに避難先での人間関係を開拓し深めることを躊躇する様子うかがえた。やや深刻な見方をすれば、避難先で心理的に孤立しかねない状況にあったことがみてとれるが、同じく福島から避難してきた友達が互いに拠りどころとなっていることもうかがえた。

母Bの語りでは、避難先コミュニティの習慣に当初抱いた当惑が語られている。笑いを交えて話してくださったことからもうかがえるようにそれほど深刻な様子は見受けられなかったが、避難先コミュニティにおいては、避難者が単なる新参者ということ以上に注目され、周りから支援を受けうる立場であるため、今回みられたような習慣差が相応のストレスを生む可能性もあると考えられた。

#### (4) 避難母子の会の設立

2011年7月に、A家・B家の母親が中心となって「避難母子の会」を立ち上げた。メンバーは関東圏に母子で避難した方々が中心であり、当初は、毎回15名前後の母子が参加していた。母親たちによるこうした動きがでてきたことについてさらに詳しく考察するために、「避難母子の会」の設立・活動動機に関わる語りを取り上げて検討する。

(「たとえばこんなお手伝いとかあったらいいのに、とか思ってることありますか?」)

母A： 今は逆に、お手伝いをしてほしいというより……。私も福島に5年住んで、なんか見えてきてしまった立場で、どこか後ろめたいと思っているので、福島の土壌改善とか、福島の方たちが安全に暮らせるネットワークっていうか、(略)私が作りたい、作れるわけじゃないけど、そういうので活動したいっていうか。(略)自分も支援できる立場に早くなりたいっていうか。(2011.6)

このやりとりはA家の避難が一段落した直後のものである。ここでは、自主避難者が自らを「支援を受ける側」の立場に置くことを躊躇する気持ち、地元に対して「後ろめたい」と思いながらも地元の復興を願って自ら何か行動を起こそうとする気持ちが切実に語られている。ここで語られたような気持ちや先述した「新旧の人間関係に対する複雑な心理」が「避難母子の会」の立ち上げに大きく影響したと考えられた。さらに、母子の会のメンバーが原発や補償関連の集会に頻繁に参加していたことからもうかがえるように、「自主避難者が置かれた状況を自ら社会に向けて発信していく」という動機も強いと思われた。

筆者らは交流会発足当初は会場の手配等、母親たちがスムーズに集まれる場を提供するような支援を行ってきたが、このようにして立ち上げられた避難母子の会の活動の展開を見聞しながら、母親たちの思いや力強さを改めて感じ取り、これ以降、本プロジェクト全体のスタンスを調整していくこととなった。具体的には「支援者－被支援者」という関係にとらわれることなく、積極的な生活者・発信者としての自主避難家族の姿を記録しつつ、何か問題が発生したときにはすぐに対応するスタンスに移行していった。

#### (5) 今後の見通しが立たず「宙ぶらりん」

母子訪問の際には「その時々気持ち」をうかがってきたが、とくに避難後3カ月を過ぎた頃から多く聞かれたのが「宙ぶらりん。はっきりしない」「次の行動に移せない」「仕事が決まらなると生活の見通しが定まらない」といった語りである。避難することによってひとまず切迫した危機を乗り越え自律的な環境を確保した段階から、次に、職業など今後の生活・人生を長期展望し始めている様子がうかがえた。

#### (6) 子どものストレス表出

A家では、福島から離れ当面の生活が落ち着いた2011年5月から6月頃に、母親が子どもの行動上の問題に気づく場面があった。

母A： 息子も1カ月前[5月頃]は身体的に、なんていうか、こういうふうにする(口をもごもご動かす仕草)のがでてきて。(略)あれって精神的な部分からくる……。チックの一種だろうなって私も思って。(略)あとエレベーターとかも、もし地震で止まっちゃったらやだからって、絶対に一人じゃ乗らない。(略)娘が最近、1週間くらい前は喉が痛いって言って。(略)小児科に連れていったら案の定「お母さん、これなんでもないですよ」って言われて。それが治まったかと思ったら、今は毎日「おなかが痛い。おなかが痛い」って言うんですね。(2011.6)

A家の子どもたち(男児、女児)は当時7歳と3歳だった。ここで語られたことから、避難先での生活が落ち着いた頃に子どもに起こっていたこととして以下のことが指摘できる。

まず、チック様症状など、ストレスや緊張に起因するとみられる身体症状が発生していたこと、そして、避難後も震災の恐怖が継続していたことである。また、3歳だった女児の行動が母親への頻繁な訴えかけというかたちをとったことは、とくに幼い子どもからすれば震災から避難までに親の判断で状況がめまぐるしく変化し親が子どもを十分にみる余裕のない期間が続いたため、状況がひとまず落ち着いてから親の注意を向けさせる、あるいはある種の不満を表出する行為だったと考察できるかもしれない。

#### (7) 避難先コミュニティへの適応に関する子どものたくましさや消極性

A家とB家の子どもの避難先コミュニティへの適応については、母親・父親の語りとわれわれによる子どもの観察結果から総合的に検討した。子どもたちは当初、十分な準備もないまま避難先の学校や地域の人間関係への適応を迫られたわけであるが、結論からいうと「避難先にたくましくとけ込もうとする姿」と「避難先にとけ込むことに対して消極的な姿」の両方の様子がみられた(2011月6

～11月)。

たとえば前者の事例では「近所の子どもたちと屋外で水遊びをしている場面で、一緒に遊んでいた子どもの1人が、離れたところにいた本プロジェクトメンバーを発見して不審がったことに同調して、本プロジェクトメンバーに水をかけ、その後、子どもたちと別れてからばつの悪そうな表情を浮かべる(→まだ近隣同士の子どもの集団における自分の立場が不安定な時期に、プロジェクトメンバーを共通の敵に見立てることで集団への参入を図るような行動と解釈された)」「インターネットを活用して、被災児童同士でつながろうとする」といったエピソードがみられた。後者の事例では「プロジェクトメンバーと外遊びをしているときに近くを通りかかった同い年くらいの子どもの目にやり、気にするそぶりを見せるものの、自分から接触しようとはしない」といったエピソードや、GPS・Actigraphによる行動圏・活動量測定において動きが少ない傾向がみられた。

子どもが「避難先にとけ込むことに対して消極的な姿」をみせたことについては、母親が「1学期は子どもがたぶん自分の何かでいっぱいいっぱい……」「[当初は]私も半年たったら福島に帰ると普段から言っていて、近所のお母さんとあまり仲良くしてはいけない感覚があったりしたので、息子にもなんとなくそういうのが……[伝わったのではないか]と推察するように、子ども自身に心理的な余裕のなさがあったり、親の複雑な心境を暗に汲んだりしていた可能性がある。

以上のように、A家、B家の子どもたちの事例では、避難先コミュニティへの適応に際して、自らの立場を理解したうえで、周囲の人間関係や状況をモニターしながら適応しようとする、あるいは適応をためらう様子が垣間見えた。これは家族全体の今後の見通しの立たなさや深く結びついているようであった。

## 2 2012年度以降

関東で家族再統合した事例と母子避難が継続する事例それぞれについて、考察していく。

### A家 関東で家族再統合した事例

#### (1) 家族再統合による安堵と戸惑い

A家は2012年度から父親が関東へ転勤し、家族が再統合された。以下の語りは、それに伴う引越しなどがひと段落ついでから家庭を訪問したときのものである。

<p>母A： 私も最初気が張っていて夫の生活に合わせて、(略)夫と早く生活したいって避難の時に思っていたのに、[いざ一緒に暮らし始めたら]邪魔と感じてしまった。(略)でも夫もだいたいストレスたまってると思います。それでたぶん私に対してもホントはストレスあると思うんですけど。(略)</p> <p>.....</p> <p>(「お子様たちは、お父様が来られて何か変わられましたか？喜んでましたよね?」)</p> <p>母A： そうですね、やっぱり喜んでますね。基本的に。でも……(略)、1回か2回は、落</p>
--

ち着いたときに息子が3人のときの生活の方が良かったよってというのは、まあ私その前にそういうこと言っちゃってたんですけど、まあそれを真似した感じで言っているのを聞いて、私もけっこう息子の口から聞くとショックだったというか。でも私が言った言葉だと思ってちょっと反省はしたんですけど。(2012.8)

この語りでは家族全員の心境全てが詳しく語られているわけではないが、一家揃っての生活が再開することを待ち望んでいたにもかかわらず、いざそれが実現すると家族成員にストレスが生じていたことがうかがえる。家族は父-母子分離中に、それに適応したシステムの状態を作り出していたはずである。家族が再統合することでシステムの再編が生じ、一時的にせよ不安定な状態を作り出したのだと考えられる。それが心理的には「安堵と戸惑い」とでもいうべきアンビバレントな感情で表出されていた。

A 家の場合、2014年9月時点で家族の状態を訊いたところ「震災前と変わらない感じ」とのことだったため、幸い安定状態に戻ったと考えられる。とはいえ、家族システムの変化は一種の危機的場面でもあった。父-母子分離期間中に家族内の葛藤が大きかった場合は、家族再統合後の不安定状態が長期にわたり、場合によっては反発感情を強めることもありうると考えられた。

## (2) 「避難者である」「避難者でない」の自己認識の揺らぎ

(「関東、こっちで暮らせる見通しがたったときにどういう気持ちでしたか?」)

母 A: あんまりこう人にお世話になりすぎているのも、どこか心苦しいというか。(略) 自立した生活をしたくなって思っていたので、ちょっとホッとした気持ちにはなりました。はい。(略) でも避難者の会を立ち上げていて、友達とやっていて、そのなかからは自分だけ、じゃあ避難者じゃなくなったからみたいなのは。(略) 最初の1カ月くらいはモヤモヤしていたというか……。 (2012.8)

母 A にとって「避難者である」ことは、他人に世話・支援を受ける者であるという自己認識につながるものであった。それを「どこか心苦しい」と感じていたため、家族が再統合し、自立した生活ができるようになることで「ほっとした」ことが語られている。その一方で、これまでの避難生活で築いてきた避難者仲間の間では「一員のまま」として認識されており、そこでの関係性も意識しつつ、自己認識に揺らぎが生じていることがうかがえた。こうした揺らぎは次に述べる「人間関係の再編成」とも大いに関連すると考えられた。

## (3) 人間関係の再編成

「人間関係の再編成」は録音されたインタビューからではなく、A 家・B 家を含む避難者たちと筆者らの会話記録(フィールドノート)から概念化したものである。避難者の生活の多様化が進むなか、2014年現在の避難者が直面することとして重要な点であると思われるため、ここで論じておくことにする。

「新旧の人間関係に対する複雑な心理」「避難母子の会の設立」で検討したとおり、警戒区域外からの避難者は、福島に残る選択をした知人・親族や避難先近隣住民に対して複雑な心境を抱きつつ、そ

のなかで適応していくことを迫られた。そして、同じ体験を共有した仲間として避難者同士で連帯するような動きがみられた。しかし、年月の経過とともに、「関東で家族が再統合する」「父親が福島に残り続ける」「福島に帰還する」など、避難者が下す決断や生活は多様化していく。それは避難後に築かれた避難者同士の人間関係にも影響を与える。

母 A の場合、「『避難者である』『避難者でない』の自己認識の揺らぎ」が生じた時点で避難母子の会の以後の活動に参加すべきなのかどうか思案するような時期があったことが語られた（2013. 3）。しかし、2014年9月の時点でのインタビューでは、「避難母子の会の仲間」との関係は途絶えることなく、むしろ震災・避難という経験をともにしてきた仲間であり、「一番安心もするし、気を遣わないし、一緒にいて楽しい」という思いが強くなり、そこが自分の居場所であると感じていることが語られた。また、避難者の会の仲間からは「避難者じゃなくて避難経験者だね」といった一言をもらい、それまで感じていた葛藤が吹き飛んだそうである。

つまり、母 A のまわりの避難者たちは、現在はそれぞれの置かれた立場にこだわらない人間関係を築きはじめていることがうかがえる。この関係の再構築化と維持は、避難が彼女らにとって重要な共通体験であったことを示唆している。しかし避難者全体に目を向ければ、そうではないケースも発生している可能性がある。したがって、避難先地域との人間関係なども含めて、人間関係の再編成の具体的な様子については今後さらに詳しく検討していく必要がある。

#### （4）子どもの一番の親友は福島での友達

2013年8月、そして2014年9月の母親へのインタビューで子どもの人間関係についてうかがったところ、A家の男児（避難当時7歳）は、関東で新しい友達ができただけでなく、特定の親友がいるわけではなく、「今でも親友は福島で友達になった〇君」と母親に語り、その子とは年に1、2回会っているそうである。児童期は仲間関係が発達する時期であるため、福島で最初にできた親友を大切にしているということなのかもしれないが、この語りが真に何を意味するのか、今後さらに詳しく検討していく必要がある。

### B 家 母子避難が継続する事例

#### （5）落ち着いて家族で話をする機会がとりづらい

B家は2014年11月現在も、父親が単身で福島に残り、母子避難生活を続けている。子ども（男児。震災当時9歳）が関東の中学校に進学したこともあり、当面は母子避難が続く見通しである。

父 B：（父母で）たまたまそういうちょっとした話 [今後の生活のことなど] になったりすると、[子どもが] すごく聞いてるわけですよ、耳を立ててね、後ろの方でね、うちら [父母] の会話をね。やっぱり、そういうところってすごく心配してるっていうか、気になってるっていうの当然あると思うんですよ、彼は彼なりに。なので、あんまりなるべくはそういうことは、喋らない方がいいのか逆にオープンに皆で話して喋ったほうがいいのか、っていう部分はあったんですけどね。今はあんまりやっぱりちょっと気にして、そういうところははっきり喋らない

ところは雰囲気があって。

.....

[子ども] 話すタイミングを考えると、フッと落ち着いて話すタイミングってなかなか作れないんで。あっち [母子の避難先] にいくと、公衆浴場とか、銭湯みたいところになるべく [子どもを] 連れて行って、ちょっと足湯みたいところに浸かってね。話をするわけですよ。(2013. 2)

B家では、およそ1カ月に1回のペースで父親が関東の母子に会いに行き、長期休暇等では母子が福島の家に行くこともある。また、父親は毎朝母子に電話をかけ、一家で揃って起床し、子どもが夜に塾から帰宅する時間帯にも電話をかけている。この語りではまず、そうしたタイミングで父母が今後のことなどについて相談する際に、子どもが心配して聞き耳を立てている様子が語られている。また、父親はそのことを気にして父母の会話を控えるようにしており、その一方で、父子で話す機会を積極的に設けるようにしていることが語られた。

母子避難により家族が揃う時間が限られるため、その分、家族で過ごす時間は貴重に感じられてはいるはずである。そうしたなかで家族の今後の生活などシビアな相談を避けようとする雰囲気が醸成されるのは容易に想像がつく。また、それには今後の見通し自体が立ちにくいという状況が拍車をかけていると考えられた。

#### (6) 見通しの立たなさの継続とそのしんどさ

父B： 今の状況だと、先がどうするのかっていうのが不安定っていうか、はっきりしないじゃないですか。(略) もしかして来年帰ってくるのかとか、いや、[子どもが] あっち [避難先] の中学校入って、中学卒業して帰ってくるのかとか、そのへん、非常にわからない部分があって。(略) それ [見なし仮設住宅制度] はいつまでも続くわけじゃないから。そしたら当然、こちらに家があってあちらにアパート借りるとか、できませんからね。そしたら、その時点でなんらかの決断をしなきゃいけないわけですよ、私たちは。(2013. 2)

母B： まだ先が見えないし、宙ぶらりんではある。でもそれが続くと疲れるから。いつまでも避難者じゃられない。いつまで避難者なのかということを最近考え始めた。(2013. 2)

ほぼ同時期に、別々の場面で語られた父母の語りであるが、今後の見通しが立たないことが共通して語られており、そこには「子どもの進学」や「見なし仮設住宅制度」の問題が深く関係していることがうかがえた。こうした状況は多くの避難者にあてはまるものと思われる。また、それにより、避難後3カ月頃くらいから聞かれるようになった「宙ぶらりん」という気持ちが依然として継続している。そのことは家族全体に疲労感をもたらし、それが家族にも自覚されていた。

#### (7) 非警戒区域における「避難した家族」と「避難しなかった家族」の不和

父B： 地域の商工会の集まりに行くと「あー、お前んちまだ逃げてるのか」と、そういう話ですよ。酒の席ではそればかりなわけですよ。(略) ま、相手方からするとそういう気持ち

ちになるのは分かるんですよ。(略)社員だっているし、そこで子どもと嫁だけ違う場所で生活させるってわけにもなかなかいかなかったりだとか。(略)すごくその辛い選択をしてる部分もあると思うんです。(略)そういうのはやっぱり出てきますよね。当然ね。いろいろやっぱり複雑ですよ。(2013.2)

福島に残る父親Bのこの語りからは、非警戒区域では「避難するか否か」の決断にはさまざまな背景があり、それが、避難した家族と避難しなかった家族の間で不協和をもたらす場合があることが述べられている。こうした状況は、避難者が将来的に帰還するのかどうかという判断に大きな影響をもたらすと考えられた。

## 4 ま と め

本研究を通して、母子避難家族が、震災直後に自主避難・母子避難という選択を下して関東に避難し、そこから家族内外におけるさまざまな人間関係上の危機・軋轢を経験しつつも、全体的にはたくましく適応していくプロセスを描き出すことができた。同時に、母子避難を続ける家族はまだまだ見通しが立たない状態で疲労が蓄積していること、また、家族再統合した家族であっても、統合直後には家族が不安定化し、家族内外を含めて人間関係の再編成が起こりうることも明らかとなった。

家族再統合した場合、世間的には「避難者」と見なされることは少なくなると考えられる。しかしながら、避難時や避難生活において「選択を迫られる場面での夫婦・親子・親族間に生じる意識のズレ」を経験してきた家族にとっては、思いのほか大きな危機となる場合もありうる。もちろんそうではない家族が大半とは思われるが、「原発離婚」という言葉も登場したことを踏まえるならば、たとえ避難者(家族)でなくなったケースであっても、慎重に見守る必要があるのではないだろうか。

そして、いまだ母子避難生活を送る家族については、種々の問題とそれに伴う疲労が蓄積している点が懸念される場所である。それは本稿でも示したとおり「見通しの立たなさ」によるところが大きいと考えられるが、避難者に対する住宅供与制度や母子避難者に対する高速道路の無料措置制度が1年ごとに更新されるような状況では、長期的な見通しを立てづらい。国の政策のあり方が避難家族の状況を直接に左右しているのである。そしてこれには避難家族の経済的背景も大きく関わってくるはずである。経済的窮迫感が親の情動的・行動的問題を引き起こし、さらには養育・子育てに影響を与えうる(Conger and Donnellan, 2007)という側面には注意を払っておくべきである。

次に今後の課題について述べる。本研究では震災から1年後の2012年度以降における母子の地域への適応について十分に検討することができなかった。避難者の生活が多様化し、帰還の判断が難しくなるなか(福島民友, 2014)、刻々と変化する状況に合わせて避難家族がどのような人間関係を築いていくのか検討していくことが今後の第一の課題である。続いて、避難家族にとって震災・避難体験が今後の人生にどのような長期的影響を与えるかを検討することが第二の課題である。2013年頃から、避難者自身の口から人生観の変容について語られることが増えてきたように感じられる。これは今回の震災が避難者の人生にとって「転機(turning point)」(杉浦, 2004)となったことを示しており、

さらに、生涯発達の視点から震災・避難体験の影響を捉えていく必要性を示唆していると思われた。

最後に、これはわれわれが避難家族に初回のインタビューをした時点から感じてきたことであるが、避難者が語る際、「つらさ」や「悲壮感」といった「避難者らしさ」を（研究者の期待に込めて）演じてしまっている可能性もあるのだということを忘れてはならない。研究者がそのことに無自覚な場合、避難者の体験や心情を捉えそこねてしまいかねないし、ステレオタイプな避難者像の構築に加担してしまう恐れがある。そうならないよう自戒しつつ、「わたしたちは、ただ普通に暮らしたいだけ」と語る避難者に対して何ができるのか、引き続き考えていかねばならない。

**謝辞** 本調査・支援に深い理解を示して協力してくださった、A家とB家をはじめとする避難母子の会の皆様にご心より感謝いたします。また、本プロジェクトは学部生を含む大勢の発達行動学研究室の現・旧メンバーの協力のもとで行われています。とくに、野田麻衣子氏、米澤香那子氏、相川公代氏には、避難家族への接触、データ分析等で大変お世話になりました。

### 参考文献

- 紺野祐・佐藤修司（2014）「東日本大震災および原発事故による福島県外への避難の実態（1）——母子避難者へのインタビュー調査を中心に」『秋田大学教育文化学部研究紀要教育学部門』69。
- 杉浦 健（2004）『転機の心理学』ナカニシヤ出版。
- 根ヶ山光一・平田修三・石島このみ（2012）「原発事故による避難家族への支援」『臨床発達心理実践研究』7。
- 平田修三・石島このみ・持田隆平・白神見子（2012）「かささぎプロジェクトによる震災避難家族の支援」『人間科学研究』25/2。
- 平田修三・石島このみ・持田隆平・根ヶ山光一（2013）「震災避難家族の支援——かささぎプロジェクトの活動」辻内琢也編著『ガジュマル的支援のすすめ——一人ひとりのところに寄り添う [東日本大震災と人間科学①]』早稲田大学ブックレット《「震災後」に考える》31，早稲田大学出版部。
- 福島民友（2014）「避難者、悩み多き生活再建 帰るべきか…避難先に残るか」〈<http://www.minyu-net.com/osusume/daisinsai/serial/140911-2/news1.html>〉（2014年10月31日）。
- 復興庁（2014）「全国の避難者等の数」〈[http://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat2/sub-cat2-1/20141031\\_hinansha.pdf](http://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat2/sub-cat2-1/20141031_hinansha.pdf)〉（2014年10月31日）。
- 保坂裕子（2003）「アクション・リサーチ」無藤隆・やまだようこ・南博文・サトウタツヤ編著『質的心理学——創造的に活用するコツ』北大路書房。
- 山根純佳（2013）「原発事故による「母子避難」問題とその支援——山形県における避難者調査のデータから」『山形大学人文学部年報』10。
- Conger, R. and B. Donnellan（2007）“An interactionist perspective on the socioeconomic context of human development,” *Annual Review of Psychology*, 58: pp.175-199.

---

## “Adaptation of the Evacuated Families and Children due to the Fukushima Nuclear Disaster: Concerning a Relationship between Person and Place”

By Shuzo Hirata, Konomi Ishijima, Ryuhei Mochida, Yuko Shiraishi and Koichi Negayama

Keyword: nuclear power plant accident, voluntary evacuation, community network, case study, Kasasagi Project

---